

高齢社会の都市構想学ぶ

徳島市 徳大地域交流シンポ



健康・医療・福祉のまちづくりについて約100人が学んだ徳島大学地域交流シンポジウムととぎんトモニプラザ

健康・医療・福祉のまちづくりを考える徳島大学地域交流シンポジウムが16日、徳島市のとぎんトモニプラザであり、約100人が寝たきりを防ぐための都市構想について学んだ。

初台リハビリテーション病院脳卒中診療科長の酒向正春さんが、健康医療福祉都市構想について

説明。東京や松山に進められているパリアフリーの公園兼歩道「ヘルシーロード」の計画を紹介し、「病院でリハビリをし、町に出て元気になるのが理想。超高齢化社会に対応した都市整備が重要だ」と訴えた。

富山市の神田昌幸副市長は次世代型の路面電車などを活用したコンパクトシティの取り組みを紹介し、「歩いて暮らせるまちづくりを進めることで町ににぎわいが戻った」と語った。

飯泉勇門知事を交えた座談会も開かれた。(奥村靖之)

平成23年10月17日 徳島新聞

脳卒中患者の研究結果報告

牟岐で徳大准教授ら海部郡をモデルに、へき地の救急医療体制に関

する研究「海部プロジェクト」に取り組んでいる徳島大学は4日、牟岐町川長の海の総合文化センターで、郡内の脳卒中患者を対象にした研究結果

の報告を行った。同大学病院脳神経外科の影沼照喜准教授ら5人が、住民約1700人を前に講演。徳島市周辺で脳卒中を発症した場合に比べ、郡内では救助を必要とする障害が残るケースが多いことに触れて、影沼准教授は「専門医の不在や郡外の専門病院への搬送が長時間になることが原因」と指摘。行政による医療環境整備の必要性を訴えた。

また、3時間を超えて医療機関を受診した人が56人中26人いたことについて「住民に病気の症状や対処法など正しい知識を啓蒙していかねばならない」と話した。

専門医による脳卒中や心筋梗塞など1分1秒を争う病気の症例や予防についての説明もあった。同プロジェクトは来年3月末まで続けられる。(城福章裕)

平成23年6月5日 徳島新聞

復興への光 被災地へ届け



点灯したツリーを見入る学生ら(徳島大南常三島キャンパスで)

東日本大震災の復興と、台風12号による犠牲者の鎮魂の願いを込め、徳島大の南常三島キャンパスで発光ダイオード(LED)で作ったツリーの点灯式があった。学生ら85人がLEDの優しい光を見つめながら、被災者へ思いを寄せた。ツリーは1月末まで点灯される。

総合科学部の吉田敦也教授が、被災地と徳島とを復興への思いでつなげようという企画。同学部の平木美穂教授がデザインを担当し、学生ら約40人が昼休みを利用して、約50分のクギ並木を飾るLED照明を制作した。

会場の同学部2号館前では、点灯を前に午後5時55分から1分間黙とう。6時ちょうど、赤や青に変わるLEDで飾られたツリーが点灯すると、参加者は歓声を上げながら拍手を送った。

同学部大学院博士課程1年の清水勇吉さん(25)は「明るすぎない光が優しくいい」と話した。

平成24年1月7日 読売新聞

災害・医療 課題探る

牟岐でタウンミーティング



海部郡の医療や災害への備えについて意見を交わすパネリスト＝牟岐町の海の総合文化センター

海部郡の医療や災害への備えについて考えるタウンミーティングであり、町内外の約300人が座談会や講演に耳を傾けた。

座談会は、徳島大学や大分県、国交省、地元地域医療を守る会などからパネリスト7人が報告し、その後参加者を交えて意見交換した。

県南の道路整備については、東日本大震災での事例を挙げて「高速度が命の道として、郡外の救急搬送や津波避難場所の確保(役立つ)」と早期整備の必要性を強調。医師確保については「医師が働きやすい環境を住民がつくっていくことが大切で、自らの安心安全を保つことにつながる」などの意見が出された。

タウンミーティングは、徳島大が地域の課題解決策を模索する8年目の道として、郡内外の救急搬送や津波避難場所の確保(役立つ)と早期整備の必要性を強調。医師確保については「医師が働きやすい環境を住民がつくっていくことが大切で、自らの安心安全を保つことにつながる」などの意見が出された。(南志郎)

平成24年3月5日 徳島新聞